

# 袁行霈主編『中国文学史』

(高等教育出版社、一九九九年八月、全四卷)

林 香 奈

本書は、「二十一世紀に向けての課程教材」と付される副題が示す通り、大学生のための教材として上梓されたものである。

最近中国では、本著に限らず様々な文学史が出版、再版されているが、その背景には、中国の大学教育の在り方に対する考え方の変化が絡んでいるように思われる。具体的に言えば、その一つは、文学研究の細分化、専門化が進む中で、全体を見渡すだけの慎重かつ周到な態度が失なわれ、狭隘な視野でもって研究対象を見ることによって、研究そのもののまでが矮小化することに対する危惧である。もう一つは、大学院の殆どの授業が従来の受け身型の講授形式から討論・演習形式に移行しつつあるということにも対応していよう。実際に著者の一人である袁行霈氏は、現在北京大学の大学院生を対象に本書を補助教材として「文学史研究」なる授業を開講しておられるが、そこでは一文学史のみに頼った評価・判断の危険性、或いは文学史上の問題点を見抜く力または通説への懐疑の重要性がしばしば強調されている。そして、自分なりの視点を持って文学史を構成し直すこと、限られた時間（字数）内でその論点を明確にすること、その論拠や出典を明示すること、などに重点を置いた訓練が行われている。

本書では、そうした研究姿勢や研究方法について読者である大学生に啓示を与えようとする試みがなされており、そのための工夫が随所に見られる。また、啓蒙書ではあるけれども、文学史を如何に捉えるかという点で啓発される部分が少なくない。

本書の構成は以下の通り(括弧内は執筆担当者)。

## 目録

### 第一巻 総緒論 (袁行霈・北京大学)

- 第一編 先秦文学（聶石樵・北京師範大学）
- 第二編 秦漢文学（李炳海・東北師範大学）
- 第二卷 第三編 魏晉南北朝文学（袁行霈・北京大学）
- 第四編 隋唐五代文学（羅宗強・南開大学）
- 第三卷 第五編 宋代文学（莫礪鋒・南京大学）
- 第六編 元代文学（黃天驥・中山大學）
- 第四卷 第七編 明代文学（黃霖・復旦大学）
- 第八編 清代文学（袁世碩・山東大学）
- 第九編 近代文学（孫静・北京大学）

後半の三、四巻については些か評者の手に余るところもあるので、歪ではあるが、以下主として前半の二巻を中心に、教材としてどのような特徴を備えているか、その特徴を見ていくこととしたい。

本書全体のコンセプトが示される「総緒論」において袁氏はまず、文学史は「文学を文学として研究するもの、文学本位の立場から著されるもの、文学の文学たる所以並びに芸術的影響力やその審美価値を重視するもの」であるべきだとする。また、文学史研究においては文学以外の分野との関連を常に意識する「文化学的視角」も重要であるとしながらも、あくまでその中心は、社会的、政治・経済的背景の研究或いは作家研究よりも、文学作品そのものの発展過程に据えられるべきであるとする（第一巻三～五頁）。

また、王朝の交替と文学潮流の変化との間には関連性が認められること、「王朝別時代区分が従来の文学史教学・研究の習慣に合致し、扱いやすい」ことから、先に挙げたような時代別の章立てを採用してはいるものの、複眼的に文学史を捉えるために今一つ別の時代区分によっても同時に考察すべきであるとして、「三古七段」の分期を提示する（第一巻一二頁）。この分期は、やはり文学そのものの発展変化における九つの側面（「創作主体」「作品思想内容」「文学体裁」「文学言語」「芸術表現」「文学流派」「文学思潮」「文学伝播の媒体」「対象認識」）に照らして総合的に考察して得られたものと説明されている。

具体的には、先秦兩漢を「上古期」とし「先秦」「秦漢」の二段に、また魏晉から明中葉を「中古期」として「魏晉～唐中葉（～天寶末）」「唐中葉～南宋

末」「元初～明中葉（～正徳末）」の三段に、明中葉から“五四”運動を「近古期」とし「明の嘉靖年間初～鴉片戦争」と「鴉片戦争～“五四”運動」の二段に分けている。また三期の分類基準として、「上古期」は各文学体裁が育まれた時期、また文学思想の基礎ができ、それを中心に文学思潮が分岐していった時期、士大夫が文学の創作・伝播・受容の主体となる時期、「中古期」は中国文学の自覚の時代、文学言語が画期的変化を生む時代、詩・詞・曲の鼎盛期、文言・白話小説の発生と発展の時期、伝播のメディアの出現（出版・講唱・舞台）と文学の主体と対象が宮廷から市井まで拡大した時期、「近古期」は市民の文学、文人・文学の商品化の時代、人間の欲望を肯定する時代、通俗文学隆盛期と規定する。

この分期について袁氏は、鄭振鐸の『插图本中国文学史』も「古代」（先秦～西晋）「中世」（東晋～明の正徳末）「近代」（明の嘉靖初～“五・四”以前）の三期に分類する形を採ることを注で触れている（第一卷二〇頁注二〇）。これは、同じ様な分期を採用するものの、鄭氏は上梓された当時（一九三二年）の社会状況を強く反映した発想に基づいて、「古代」を外来文学の影響を受けない「本土の文学」、詩と散文の時代、「中世」を印度からの仏教文学の影響を受けた時代、多くの新しい文体が生み出された時代、「近代」を現在まで生き続けている文学、昆劇（外来の影響を受けない本土の文学）が生み出された時代と規定して、社会的、思想的背景に重点を置いた分類を行っているのに対し、袁氏の分期はあくまで文学そのものの変遷に着目したものであることを意味していよう。

また袁氏は、文学史の記述は事実や簡単な作家論の羅列に終始するものや、様々な事象をある一定の評価によって規定するような性質のものであるべきではないという立場から、従来の文学史にしばしば見られる「評価式」記述ではなく、「叙述式」の方法でもって多面的、客観的に記述されるのが望ましいとも述べている（第一卷五頁）。

以上のように、本書では、文学そのものの発展の経緯を、複眼的な広い視野をもって考察しながら、あくまで文学作品を中心に客観的に記述していく方法を採用することが強調されている。

では、実際に本書においてこうした考え方を反映した工夫が如何になされているのか、具体的に例を挙げてみたい。

まず目を引くのは注の豊富さであろう。従来の文学史には詳細な注を施すものは殆どないが、本書では各編の各章ごとに詳細な注が施されている。特に、陶淵明や李白、杜甫のように一章を立てて論じられる詩人については本文で詳細に事跡が記されるが、それ以外の詩人や主要作品に関する説明は殆ど注に落とされ、本文自体は簡単な紹介に次いですぐに作品の分析及びその作品の持つ意義についての解説に入ることが可能になっており、全体が眺めやすくなっている。この方法は、事跡や作品の紹介に紙幅を取られて作品の解説が不十分になりがちで、著名な詩人の伝記の羅列に終わっているという印象を与えかねなかった従来の文学史の欠点を補っていると言えよう。

また、本文で示される内容についての論拠や出典、先論の紹介は言うまでもないが、本文の記述に対する異説や、その問題について現在どの程度まで明らかになっているかということが出来る限り紹介されていることも注目される。例えば、第四編第七章「白居易与元白詩派」においては、白居易の新樂府について本文では元和四年に作られ元和七年にかけて改訂された作とし、その内容について簡単な説明を加えた後、「売炭翁」などの代表作の解説を行うに留まっている（第二卷三四五頁）。しかし、注においては新樂府に関する主要な問題点として、創作の原因、創作年、新樂府運動の三点について詳細な補足や異説の紹介が加えられている。特に、唐代に新樂府運動があったか否かという疑問が呉庚舜氏（「略論唐代樂府詩」、『文学遺産』一九八二年第三期）によって提出されると、八四年以降次々とそれに関する論考が発表されたことを紹介し、主なものを挙げてその論点を簡単にまとめている（三五七頁注七）。また同じ章で、元稹の事跡に触れている部分があるが（三五八頁）、その注では元稹が朝廷にもどり官について以降変節したという問題について、変節したと見る陳寅恪などの旧説を紹介した上で、ここ十年来それに反する論考が様々な角度から打ち出されているとして、八〇年代後半以降の新しい研究成果を紹介している（三五七頁注五）。こうした工夫は、一つの見方によって文学史を限定しないという緒論のコンセプトに合致しているだけでなく、興味のある読者に研究

の手がかりや疑問を持つきっかけを与える効果があると言えよう。

更に付け加えれば、各巻ごとにその巻に扱われた時代に対応する略年譜が付され、扱われた詩人や作品の基礎資料が示されるなどの教材としての工夫も見られる。この年譜を併せ見ることによって全体の流れはより把握しやすくなるであろうし、資料は実際に作品を読もうとする際の助けとなる。

以上のような長所を持つ本書ではあるが、不満も無いわけではない。細部については様々な配慮がなされているものの、全体を眺めるとやはり従来の文学史の域を出ない印象を受ける。それは三古七段の新しい区分が提示されていないが、その視点による分析が際立って現れてこないためでもあろう。構成そのものまでに三古七段の分期を採用するのは、教材としても、また分担制による執筆という点から考えても無理があったのではあろうが。特に、第三編の緒論においてこの時期（魏晉～明末）に文学が自覚的段階に入り、個性化に向かったことを袁氏は繰り返し強調しているが、これは先にも示したとおり他の分期と異なる重要な点でもある。にもかかわらず同緒論において、そのように規定できる指標として、文学の学術からの独立、文学の体裁や風格に対する認識、文学の審美的特性に対する自覚的追求といった傾向が挙げられるのみで、具体的な内容については、文学批評の隆盛についての『文心雕龍』を中心としたごく簡単な解説と、人物批評と文学批評の関連性についての指摘しかなされていない（第二巻四～七頁）。更に唐代の司空図については詩人としての紹介は作品とともになされているが（第二巻四一七・四一八頁及び四二三頁注二九・三〇）、彼の『詩品』についての言及はない。魏晉以降を一つの分期として括る以上、唐代以降の文学批評の流れについても多少触れられてもよかろう。更に言えば、画期となった魏晉南北朝時代の文学批評については別に一項目を立ててもよかったのではないか。

また、文学作品中心の記述に重点を置くという点から第三、四編は多くの原文を引用しながら作品が分析されているが、原文の引用なしに作品の解説だけに終わっている箇所もあり、統一が望まれる。例えば、第二編第四章「両漢楽府詩」や第七章「東漢文人詩」は解説する詩くらいは引用があってもよかったのではないか。

最後に分量の問題。ふんだんに注を施し、多面的に記述していく形を採る以上、分量が増えるのはやむを得ないが、全体を一通り眺め渡すには四冊にわたる記述は些か多いように思われる。各巻ごとに独立して活用できる工夫がなされているので、個別に利用することは可能だが、教材としてはその点がもう少し配慮されるべきであろう。